

第4次安倍内閣が発足し、学習指導要領実施を含む国家改造が、推進者の交代なく強力に進められそうだ。日々、〈実践内〉問題に取り組みつつ、〈実践的〉に問題解決するしかないが、それでは限界があり、〈非実践的〉な、すなわち現実からいったん離れるような研究が今こそ必要だ。外部からの日生連研究を丁寧に取り、学問的共同をはかりたい。

木村論文は、研究論文というより「教科書」の一章で、『日本の生活教育50年』や『生活教育』を使って、2012年頃までを「簡潔」にまとめている。

「生活教育の主張の現代的意義」として3点指摘があるが、それを仮説に、あらためて日生連の歴史と成果の研究をくぐらせてほしい。

中西論文は、経験主義と本質主義(?)の対立を理論的枠組みとして、梅根悟の説と実践例



で春日井小カリキュラムの分析、また海後勝雄(うれしい!)の説と北条小の分析がされているが、それぞれで論文数本が書ける大テーマで総合考察が浅い。デュイイやコア連という〈経験主義〉は、〈系統主義〉的契機を内部に含んでいることを充分吟味してほしい。

奥平本では、「山びこ学校」という窓からは生活教育のような豊潤な戦後教育思想はほとんど視野に入らないのかと残念。

(研究部・加藤聡一)

参考文献

- ① 木村裕「子どもと社会に根ざす生活教育―生き方の探求と生活の創造をめざして―(第2章)」田中耕治編著『戦後日本教育方法史(上)―カリキュラムと授業をめぐる理論的系譜―』ミネルヴァ書房、2017年所収、67～86頁。
- ② 中西修一朗「コア・カリキュラム連盟における経験主義と本質主義―梅根悟と海後勝雄の対比に焦点を合わせて―」、『日本教育方法学会紀要 教育方法学研究 2016』第42巻、2017年所収、35～45頁。
- ③ 奥平康照『山びこ学校』のゆえに 戦後日本の教育思想を見直す』学術出版会、2016年。特に203頁。